

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：11101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20070

研究課題名（和文）地域社会の「危機」を捉える民俗学的視座の構築に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research to construct an folkloristic perspective on the "Crisis" of local communities

研究代表者

辻本 侑生（TSUJIMOTO, Yuki）

弘前大学・地域創生本部・助教

研究者番号：80958950

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：まず本研究では、「危機の民俗学」の研究史を整理し、これまでの研究の課題として、人びとが危機に対してうまく対処等できない事態を捉えられていないこと、危機自体の複合性や不確実性を捉えられていないこと、の2点を指摘した。次に本研究では、北東北地方のいて津波や食料危機に向き合ってきた海村・山村でフィールドワークを行い、地域社会が未来に災害が発生するかもしれないという不確実性のみならず、人口減少や、戦争・軍事基地の立地といった複合的な要因のもとで危機と向き合っていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は「危機の民俗学」の視座を、理論・事例研究の両面から構築したものであり、「危機」について論じてきた人文学・社会科学の他分野の成果と対話可能となる点で、学術的意義を有する。また、人口減少等、地域社会における現代的な「危機」に着目した点は、学術的意義にとどまらず、自治体の政策立案等に資する社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：First, this study summarized the history of research on "Folkloristics of Crisis" and pointed out two problems with previous research: (1) it has not captured the inability of people to cope with crises, and (2) it has not captured the complexities and uncertainties of crises themselves. Next, this study conducted fieldwork in the sea and mountain villages in the northern Tohoku region, which have faced tsunami and food crises, and found that local communities face crises not only due to the uncertainty of future disasters but also due to complex factors such as population decline, the location of war and military bases, etc.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：危機 現代民俗学 不確実性 災害 戦争 人口減少

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2011年に発生した東日本大震災以降、民俗学や隣接分野では、地域社会の中に災害とともに生きるための知識や経験が蓄積されてきたことを、津波常習地の調査研究から明らかにしてきた。

他方で、現代日本の地域社会は、災害以外にも、気候変動、感染症、国際情勢の変化等、不確実性の高い様々な危機にさらされている。多様な危機に対する不安が高まる中、東日本大震災後の10年にわたり蓄積されてきた民俗学的災害研究の視角を、より広範な「危機」に対して適用・拡張する試みが、今まさに学術的に要請されていた。

2. 研究の目的

本研究は、津波災害に限られない地域社会の危機への直面について、歴史的かつ現代的・実践的視点を有する民俗学から取り組む視座を構築するための基礎的作業を目的とした。

これまでの民俗学や隣接分野の災害研究は、眼前のフィールドに密着した現代的視点を前面に出し「災害に対して、いかに地域社会が蓄積された在来知を活かして対応してきたか」という視角で研究を積み重ねてきた。これらの研究は、在来知を活かした復興の推進に貢献してきた点に意義があるが、インタビューや参与観察による共時的な状況把握に基づき「いかに地域社会が上手く対応しているか」という視点の分析に傾斜しているきらいがあった。

こうした状況を踏まえ、本研究では、民俗学が元来有している歴史的視点を前面に出し、インタビュー等で把握される在来知のみならず、100年以上の長期スパンで地域社会の人口構造や集落形態がどう変化したかを調査することで、共時的な調査研究に基づく説明に加え、地域社会が超長期的に多様な危機と向かい合ってきた経緯を解明することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では(1)民俗学および隣接分野での「危機」に関する理論的整理、(2)実際に危機に直面した地域社会を対象とした事例研究の双方を同時並行で実施し、両者を有機的にフィードバックさせることで、地域社会の危機に対する民俗学的研究の基本的視座を構築することを狙った。

理論的整理では国内外の災害研究に加え、気候変動や感染症、戦争、金融危機等を扱った研究や、危機をめぐる民俗学・文化人類学的研究、人文学的な理論研究等を幅広く渉猟し、危機を民俗学の視点から捉える仮説的視座を構築した。

事例研究では、北東北地方において、繰り返し津波被害を受けた海村(岩手県大船渡市・陸前高田市、青森県三沢市)や、過去に凶作や食料危機に立ち向かった山村(青森県西目屋村、秋田県鹿角市・東成瀬村)を選定し、現地調査を実施した。いずれのフィールドにおいても、地域の図書館等における歴史資料調査と、短期繰り返し訪問型のフィールドワークを組み合わせる手法を採用した。具体的には歴史資料により、旧村・集落単位で超長期的な人口動態を把握し、古地図・地籍資料・航空写真等により集落形態の変化を把握する。加えて、現地での観察等により集落形態の特徴や災害伝承碑の所在等を確認し、インタビューによって生業・社会組織等の仕組みを把握した上で、過去の災害や凶作に関する伝承を収集した。

4. 研究成果

(1) 民俗学および隣接分野での「危機」に関する理論的整理

理論的整理では、柳田国男の地域社会の衰微への危機意識から始まった日本の民俗学が、1930年代に山村・海村調査を通して地域社会の多様な危機を捉えていたこと、しかし戦後になると日本社会自体が大きな「危機」に直面することが少なくなったため研究の対象としては後景化したこと、東日本大震災後には1990年代に蓄積された生業論や生活環境主義的な視角を活かしながら、生活者の視点に立った災害研究を展開させてきたこと、というように、「危機の民俗学」の研究史を大きく3つのフェーズに分けて整理した。

その上で、これまでの研究史の蓄積を踏まえつつ、今後新たに求められる「危機の民俗学」の視座として、人びとが危機に対してうまく対処できない事態を捉えること、危機自体の複合性や不確実性を捉えること、の2点を析出した。

(2) 実際に危機に直面した地域社会を対象とした事例研究

事例研究では、津波常習地である岩手県陸前高田市小友町只出集落における過去100年の災害史を検証し、津波と集落立地との関係が一貫した合理性によって裏付けられているのではなく、人口減少等も進む中で生じる状況依存的なプロセスであることを明らかにした(辻本侑生2024「『危機』とともに暮らすこと 陸前高田市小友町只出集落の災害史」『現代民俗学研究』16)。

加えて、論文化の途上であるが、必ずしも「津波常習地」と言い難い青森県三沢市の海村では、未来に津波が襲来する危険性に加え、米軍による訓練飛行の経路等が集落立地の状況依存性に

影響していることが明らかになった。

さらに、食料危機に直面した山村では、これまで焼畑を指す民俗語彙として理解されてきた「アラキ」という火を用いた開墾手法により、戦争などにもなう食料危機にも対処してきたことが明らかになった（辻本侑生 2023「危機への対応手段としての「アラキ」 北東北各地における第二次世界大戦前後の事例から」『弘前大学國史研究』154）。

以上の理論的整理・事例研究を通して、本研究では、地域社会が、未来に災害が発生するかもしれないという不確実性のみならず、人口減少や軍事基地の立地、戦争といった複合的な要因のもとで危機と向き合っていることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 辻本侑生	4. 巻 41
2. 論文標題 「農業集落」の多様性と複雑性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 175～179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2750/arp.41.175	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 辻本侑生	4. 巻 154
2. 論文標題 危機への対応手段としての「アラキ」 北東北各地における第二次世界大戦前後の事例から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 弘前大学國史研究	6. 最初と最後の頁 41～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 辻本 侑生	4. 巻 16
2. 論文標題 「危機」とともに暮らすこと 陸前高田市小友町只出集落の災害史	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代民俗学研究	6. 最初と最後の頁 35～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.60192/slf.16.0_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 辻本侑生
2. 発表標題 北東北の「アラキ」に関する再検討
3. 学会等名 日本民俗学会第74回年会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻本侑生
2. 発表標題 地域社会の「危機」を捉える民俗学的視座の構築に向けて - 山口弥一郎の北東北研究の再検討から
3. 学会等名 弘前大学国史研究会2022年度大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------